

平成 17 年 2 月 28 日

幼稚園・小学校・中学校保護者各位

田辺市立新庄中学校  
校長 岩本 知久

## 新庄地震学

### 「住民の地震に対する意識調査」

#### アンケートの分析について

余寒の候、各校・園の保護者の皆様方はますますご健勝のことと存じ上げます。

さて、昨年にお願ひしました「新庄地震学の住民の地震に対する意識調査のアンケート」結果を、和歌山大学助教授、此松昌彦先生に依頼しました。その分析報告が届きましたので、保護者の方々にお知らせいたします。これから起こりうるであろう『南海大地震』・『東南海大地震』に備えるためにも、是非ともご参考にしていただきたいと思います。

今後とも、本校の教育活動にご理解・ご協力をお願いするとともに、今回のアンケート調査のご協力大変ありがとうございました。

#### アンケート結果へのコメント

和歌山大学 此松昌彦

今世紀前半に発生するといわれている東南海・南海地震についての防災意識を広めるために、地震に関するアンケートをとっていることは地域防災に対する重要な資料となります。このアンケート調査は、前半で防災に対する意識調査を行い、後半で昨年（2004年）9月5日の紀伊半島沖地震での行動について調査しています。多様な的確な質問をされています。個人的には特に昨年の地震の行動について和歌山県民の皆さんへ同じような質問をしたいぐらいです。これを行うことによって新庄中学の皆さんは防災に対する意識にかなり変化があったと思います。またアンケートに答えた皆さんもきっと防災について考えたことと思います。この結果を地域の皆さんに返すことによって、さらに地域ではきっと地域防災力の向上につながる取り組みをされるでしょうし、しなければいけません。アンケートを整理された新庄中学の皆さん、またアンケートに答えた皆さんにとっても大事なことを行った、アンケートに参加したという誇りを持ってください。

#### 防災意識に関するアンケート

さて内容についてコメントさせていただきます。問 1 で東南海・南海地震について関心をたずねています。その結果、「非常に関心をもつ」と回答した人が世代全体平均で約 6 割、また「多少関心がある」も含めると 97% になります。これを 2003 年に和歌山県から公表された「防災（地震）に関する県民意識調査」（調査実施：2003 年 1 月）でも同じ質問があり、95% の人が関心を持っているとなっています。そこのコメントでも和歌山県南部の

方が比較的に高いと指摘されています。ただ興味深いことは20～40歳代では「非常に関心がある」と回答した人が50%未満であったというのに、今回の調査結果では40歳代で6割弱ですが、それ以外ではすべての年代で6割を超えています。これは2003年9月の地震の影響があるのかもしれませんが。問2での3～4年前に比べ関心を持つようになりましたかという質問でも、和歌山県の意識調査で80%弱なのに対して、今回の調査では9割弱の方が関心を持つようになったといいます。特に20～40歳代で9割前後になっているのに対して、50歳以上の方が67%と低くなっています。これは以前から関心を持っている人が多かったからでしょう。これは田辺、特に昭和南海地震で被害の大きかった新庄周辺という地域性が現れているのではないのでしょうか。

問5から問10については自宅の耐震化、部屋の地震対策についてたずねています。問5の結果からわかるように、地震に多くの人が関心あるのに実際には家具の転倒防止を行っていない人が多いです。これは大変な問題です。皆さんは地震への関心はあるだけで、行動としては何かを行うという段階になっていないためです。まずは自分の身を守ることからはじめないといけません。避難するにしても地震の揺れによって、家具の転倒で怪我をしたりしては避難できません。10年前の阪神・淡路大震災では死者の多くは家の倒壊や家具などの転倒による圧迫死が多かったのです。そのためにも家具などの転倒防止対策はまず防災行動の手始めだという認識を持ってください。問6の回答のように家具の固定や寝室にタンスを置かないようにしましょう。一度、自分の家の家具で倒れそうなものはないかぜひ想像してみてください。通路をふさがれては避難できないでしょう。津波が来そうな地域では無駄な時間がないのですから。

自宅の耐震対策についても問題が多いようです。もちろん耐震診断には費用がいるため、なかなか進まないという現状はあります。自治体によっては費用の補助があるところもあります。問7であるように木造住宅の方が多くですとお勧めいたします。また地震に強い建物で鉄筋コンクリートや鉄骨住宅が安全だろうということは、だいたいよいのですが、木造住宅もきちんと耐震対策を行い手入れを行えば意外と強いようです。また地盤によっても揺れの強さが違います。軟弱地盤と硬い岩盤の上の建物では揺れが違いますので、皆さんはぜひ、どんな地盤の上に住んでいるのか関心を持っていただきたいと思います。

問11で自宅付近の危険な場所を知っていますかとたずねていますが、全体平均で5割強の方が具体的な危険な場所を知らないことです。最近では行政がハザードマップ（防災地図）を作成したり、自主防災組織が地域の安全マップを作成したりしていますので、これらの取り組みをもっと支援する必要があります。私たちのできる防災行動として避難所の確認やそれまでの道が安全かぜひ家族で確かめてください。

問14で防災情報の入手方法についてたずねています。この結果をみると、日頃の防災啓発の情報と災害時の情報の入手方法について回答しているようです。圧倒的に多いテレビやラジオは災害時の生の防災情報の入手方法でしょう。昨年9月の地震でも地震が発生してテレビを見ていた人は多いでしょう。ただ和歌山南部の方は注意しなければいけない

ことがあります。たとえば串本町周辺では地震発生から津波の第1波の到達まで10分弱といわれています。津波警報がテレビで流れるまで地震発生から数分かかります。つまり場所によってはテレビの津波警報を待っているだけでは逃げ遅れる可能性もあるのです。テレビなどで「地震が発生しました、新しい情報をお待ちください」といいますが待ってられないのです。人間はどうしても情報は欲しくなりますから、待ってしまうでしょう。その辺はご注意ください。

問15では備えている防災用品として1位は懐中電灯で全世代的に共通に備えています。ただ20歳代では非常食、医薬品セットを備えている人が多いのに対して、50歳以上では軍手、水を備えている人が多い。また問16の備えておきたいものに50歳以上の方は非常食、医薬品セットが多くなっている。そのことから20歳代で備えているものも関心を持っているが優先するものが違い、特に水に関心を持っています。年配ほど水がないと大変なことになるという不安をもっているのでしょう。このへんの違いは生活スタイルの違いも反映している可能性があります。

#### 2004年9月5日の紀伊半島沖地震についてのアンケート

問1できいているように、ほとんどの人は自宅で地震を体験したようです。ただ住んでいるところに津波について考えたが、半分の方は来るかもしれないと思ったという。ただ問題点がみえてきます。「津波が来ないだろうと思った」方が2割強いたうえで、特に50歳代以上の方で4割という高率になります。これはどうしてでしょうか。地震に関してどの世代もほぼ同程度関心あるはずなのに、年配の方ほど津波について注意するかと思うと違うのです。これは以前の間3であったように地震について「とても心配している」、「心配している」の調査結果に表れているように思います。若い人ほど「とても心配している」人が多いのです。50歳代以上の方でも児童・生徒のいる保護者にアンケートをとっている関係から昭和南海地震の体験者はおそらくほとんどいないでしょう。つまり地震のない時代をずっと生活されているのです。心の隅にはずっと来ないのだからという油断が含まれているように思えます。この辺を注意する必要があります。

問3の津波が地震後どれくらいでくるかと思いませんかという問では、全体的に約8割の方が津波が早く来るという認識を持っていることはいい面だと思われます。和歌山県の津波シミュレーションによると田辺市には第1波が約25分で到達すると示されています。これを平常時で考えると服を着て、車に荷物を積みそうですが、現実的に災害時にそんな余裕があるでしょうか。また車での移動は危険です。それは皆さんが同じ行動をとると必ず渋滞を起こすからです。

問4でほとんどの人が津波警報等を聞いたようです。ではどのように知りましたかという付問1でたずねています。若い人ほどテレビやラジオからの情報を得ています。また防災無線からの拡声器も利用されているようです。また意外と「大した高さの津波ではないので避難の必要はないと思った」という回答をした方が約3割弱いたようです。これは難

しい判断でしょう。どういう所に住んでいる方なのかで判断が違うかもしれません。海岸近くの方と高い場所に住んでいる方とは意識が違うでしょう。津波の高さは湾の形によっても変化することを知っているのでしょうか。また「海の様子を見てから判断した方が良い」という項目でも全体の2割弱の方でいたようです。海の何を見に行くのでしょうか。もし引き波を見に行くのであれば止めてください。津波では必ず「稲むらの火」のように引き波があるとは限らないのです。突然、高波が来ることもあるのです。

問5では「避難の呼びかけ」について聞きましたかということですが、約3割の方が聞いていないという問題があります。これは大変な問題です。何が問題だったのかきちんと行政も把握する必要があります。知った多くの方は防災無線を聞いています。大勢に知らせる意味では重要な機材のようです。避難呼びかけの受け取り方ですが、約5割の人が「できるだけ避難した方がよいと受け止めた」と受け止めたようです。きっと行政の避難勧告とはどのような勧告なのか市民にはきちんと伝わっていないため、かなり幅のある解釈をしているのでしょう。さらに実際に避難した人は、命令と受け止めた方とできるだけ避難した方がよいと受け止めた方の一部だけだったのでしょうか。これには個人の判断がかなり入っています。付問1での問にあるように「その時居た場所が危険と思わなかったので」「予想される津波の高さが50cmとか、1m程度と放送されていたので危険と思わなかった」と判断した方が約半分以上いたようです。それが問7で自宅の海拔高度を知らない人が多いことでも反映されています。これはもっと防災啓発する必要があるでしょう。

判断を間違えると大変だという例で述べますと、年末のスマトラ沖地震の津波で歴史的な津波が発生しました。ところが、地震動の揺れとしては長周期地震動で、震度でいえば5か6程度であったようです。極端に言えば今年の紀伊半島沖地震よりもう少し強い程度の地震で歴史的な津波が発生しているのです。そのため地震動での家屋の倒壊より津波による被害の方が断然大きかったようです。大きな揺れではないから大丈夫という判断はできないのです。

避難した方のきっかけは何でしたかという問で、興味深いのは20歳代だけが「地震の揺れ具合から津波が来ると思った」「家族が避難しようといったので」が突出して多いという点です。自分の感性で行動しています。他の年代では「市町村が呼びかけている」や「津波警報等聞いたので」など他に原因が発生したために避難したということです。20歳代の方は避難者で多いわけではないですが、新鮮だからこそ警戒心も強く、自分の意志で避難しようという方が多かったのでしょうか。

今回のアンケート調査結果は、住民のみなさんの意識が詳しく反映されて興味深い結果になっています。行政や防災教育を行う人たちにも示唆を与えています。将来的には住んでいる場所での意識の違いについても検討してみたいかでしょうか。海岸近くと高いところでは意識が違うでしょう。新しいことがわかるかもしれません。本当に新庄中学校の皆さんご苦労さまでした。このような取り組みが和歌山県の各地へ広がっていくことを望みます。